第八章　民　俗

はじめに

歴史は私たちの先祖が生きてきた証(あかし)であるから、まことに大事で、将来の町を展望するためにも欠かせないものである。

歴史の多くは、人間と時間と事件の関りで構成される。誰が、何時、何処で、どんなことをしたのか、が問題になる。その事件が人々の生活に影響を与えるものであればある程、重要な歴史上の事件となる。それは、間違いなく人間が生きて来た歴史上の一側面だからである。ところが、そうした事件の歴史だけでは、私たちの先祖がどう生きて来たのか全貌はなかなか見えない。事件は、毎日の生活と密着していないこともあるからであろう。事件はすべて、ある時点の出来事に過ぎない。だから、その事件と事件の間をつなぐ、至極平凡な毎日は、どう生きて来たのかという疑問が残る。平凡な日々も、歴史の一日なのである。

平凡な日々には誰が、何時、何処で、何をしたかという問題はなく、人々は何を考え、どう生きてきたかということだけが残る。先祖のそのような平凡な中の生活をひもときながら、歴史の他の一面を探り出そうとするのが民俗である。

第一節　年中行事

毎年同じ歴日に同じことを繰り返すのが、年中行事である。何故同じことを繰り返さなければならないのだろ

うか。そして、その行事をすることに、どんな意味があるのだろうか。何十年いや何百年と同じことを継続して行うには、それだけの意味と重要性があったのだろうが、何故そうするのかなどと改めて詮議しないで、代々受け継がれてきたのが実態であろう。

ところが、ここ十数年間で生活様式が大きく変った。そしてその変化のあおりを受けて、何十年、何百年と伝承されてきたものが一つ消え二つ消えして、今では以前の行事をよく知らない人が多くなってきた。私たちの親たちが、またその親たちが、毎日毎日をつつましく生きてきた中で、どんなことを繰り返してきたかを、知ることも、有意義なことと思われるので、季別にその様子を訪ねてみよう。日附は、すべて旧暦による。

第１図：若水汲み（佐竹清四郎家）

１　正月の行事

一月一日

若水くみ

元日の朝早く汲む水のことを、「若水」という。若水を汲むときは、松と昆布をゆわえつけた柄杓で、手桶に汲む。汲む場所は庭の池か流れ水を入れてある流し場で、汲むとき「何汲む、金汲む、宝汲む。よろずの宝汲み

上げる。」と三度唱える。この若水は、元日の料理などに少しずつ混ぜて使う。

若水を汲むのは、その家の主人か長男ときまっているところが多いが、女の人が汲むところもある。唱えごとも地区によって、家によって異なっている。

「米(よね)汲む、金汲む、黄金汲む。よろずの宝汲み上げる。」（横田尻）

「何汲む、米汲む、黄金汲む。黄金の柄杓で宝くむ。」（貝生）

「よね汲む、豆くむ、黄金汲む。日本の宝を皆汲み上げる。」（滝野）

若水汲みをする日はまちまちで、元日だけのところから、一・二・三日と三ヶ日のところ（深山）、その他七・十一・十五日にも行うところ（菖蒲）、更にその他に八・十六・十七・二十日にも汲むところ（中山）、などもある。

元　日　詣

除夜の鐘をきくと直ぐ、鎮守様などにお参りに行くのが元日詣で、持って行くものは大晦日の夜準備しておく。大抵お賽銭かおひねり、とり餅などで、おひねりは半紙を小さく切ったものに、米を包んだものである。「おせんまい」ともいう。

元日詣りをする場所は地区によって決っているから、場所の数だけ供物を準備する。中山では、おせん米の残りを二日に御飯に混ぜて焚くし、栃窪では、残り米を米櫃に入れておくと、年中米に不自由しないとも言われている。

元日詣りから帰ると、箕和田などでは、黄粉をつけた「ふきどり餅」を食べる。

おかさね載き

神棚から「おかさね」を、お盆に入れたままおろし、それを、明きの方を向いて座っている子どもの頭の上にもっていって、「三つになれ、三つになれ」と子どもの年を唱え、静かに頭にのせる。お盆には鏡餅の他、栗・柿・みかんなどをのせておく。

元日の食事

元日の最初の火は、豆殻で焚く家が多い。焚き始めるときは塩を振って炉を清め、火打石で新しく火をおこした。滝野には、年取りの晩から火を絶やさない家もあった。料理の水には少しずつ若水を使うのは、長生きするからと言われているが、そのような縁起的なものとして、料理の材料につかう菊・ひょう・南天の実などがある。「よいことを菊」、「ひょうしがよい」、「難転」、などの言葉からきていると言い伝えられている。元日の朝食には餅をたべる家が多いが、家によっては、餅は食べないことにしているところもある。

一月二日

買初め・初荷

早朝、暗いうちに起きて買い物にゆく。主に日用品、好嗜品などで、前日からメモして待っている。買い初めには付木（つけぎ）・塩は必ず買うものとされてきたから、店では年末に大量に仕入れておいた。

買初めには必ず景品がついたので、子どもたちはそれを楽しみにして先を競った。

商売をしている人は、初荷になる。橇に積んだ荷の上に初荷の旗などを立て、賑やかに積み出した。

蔵　開　き

お神酒・するめ・松葉・おかさね餅などを三宝かお盆にのせ、主人が持って蔵に入り、神様に供え、そこで謡をうたって出てくる。お神酒は家中でのむ。栃窪では、金の貸し初めとして蔵開きすると言われた。

書き初め

「新玉（あらたま）の年の始の筆とりてよろずの玉をかきぞあつむる」などと書いて、年の始めの書き初めをする。

謡い初め

夜、親しい人たちが集まり、一献傾けてから、謡曲の謡い初めをする。

稼き初め

一般に稼初めは十一日になるが、地区によって、家によって、この日藁一〇丸分の「まぶし」を織ったり（浅立）、「はんばき」を編んで（中山地区）、稼ぎ初めをする。

ホッピキ

宝引きのことで、一種のばくちである。縄紐を参加者分だけ用意する。そのうちの一本だけ、端を結んで当りくじとする。参加者全員が一文乃至二文をかけ、当りくじを引いた人が掛け銭全部を貰う仕組みのものである。二日は夜おそくまでホッピキをやって遊んだ。栃窪などでは女の人が中心に楽しんだものという。

初　夢

二日の夜は、半紙やちり紙を折って舟をつくり、枕の下に敷いて寝る。この舟には「なかきよのとおのねふりのみなめさめなみのりふねのおとのよきかな」、と書いておく。この歌は上下どちらから読んでも同文になるもので、この歌によって、この夜の夢は、いい夢は正夢になり、悪い夢は逆夢になると言われている。

この地方では、「一富士二たか三なすび四夢式」といって、これを代表的な良い夢としており、良い夢をみたときは、誰にも言わずに、その夢のことを紙に書いて恵比須様に供えると、本当に良いことがあると言われている。山口では、「夢祝い」をするところもある。

一月三日

三日とろろ

三日にとろろを摺って食べると、風邪をひかないという。朝食べる家、夜食に食べる家など少しずつちがいがある。元日・二日・三日の三ヶ日間食べる家も多い。杉沢では、門松や桃の木などにも少しずつかける。桃の木に病気がつかず、実りよくするためである。

にようつみ

三日は不成就日（ふじょうにち）なので、正月礼には行かないことにしているから、この日一日は来客もないので、家中のんびり炬燵に入って休んでいる。黒鴨辺ではこれを「にようつみ」と呼んでいる。

不成就日は気のゆるみから悪いことが起らないように、家にいて精進する日とも言われている。

杉沢地区のように、三日を寺への御年始日としているところも多い。

一月四日

正　月　礼

親類とか、常日頃世話になっている人、仲人親などへの正月礼がこの日から始まる。嫁に行った人が実家へゆくときは、餅一二切れをわらで縛ったものの他、塩鮭なども持って行った。深山では、障子紙などがよく使われた。

節　　分

一月五日頃節分の豆まきがあるが、白鷹町内では豆まきは行なわない家が多い。

豆まきをする家では、豆殻に煮干しの頭を刺し、入口の戸などに挟んで魔除けとした。荒砥の長谷部庄右衛門

家では、豆をまくとき豆殻に刺した魚の頭めがけてぶっつけたという。「福は内、鬼は外」と大声で叫びながら豆をまくことは、他の地域と同じである。

節分の豆で、一年間の天気占いをする。この日の豆を月の数だけ拾い、一月分から十二月分までの豆をいろりの火の側に並べ、六月分が白く焼ければ六月日照りと占い、十月分が黒くなれば十月雨と占う。半分白く、半分黒いのは半日照りと占ってきた。

一月七日

七草（ななくさ）

七日の朝に七草粥を作って食べる。年とりの夜、歳徳神に供えた「オミダマ」でお粥を作り、それに人参・大根・かぶ・ひょう干し・なずな干し・せりなど、あり合わせの野菜を七種類ほど入れる。山口では野菜を刻むとき、「七草たたき、黄土のとりが・・・・・」などと唱えたという。また、滝野などでは、雑煮餅に七草を入れて食べた。これを、「七草雑煮」とよんだ。栃窪では、七草を煮物にした「七草煮合わせ」をつくって食べた。

一月十日

鮎貝の初市

鮎貝の市日は五日、十日である。一月十日が初市で、十五日に使う団子の木市が立つ。近郷の人が「みづき」を切ってきて売りにくるし、またそれを買うために多くの人が出て賑わう。

初市に欠かせないのが、初飴と塩である。真白で角張った初飴は、「身上のばし飴」と言われ、団子の木を買いに出た人は必ず買った。塩は「火伏せ」になると言い伝えられ、初市につきものの買い物であった。

鮎貝の初市には、大町と内町との境にある市神の祭りも行う。「市神大明神」と大書した二本の幟を立て、お神

酒・供物を供えて近所の人、初市にきた人などが、おもいおもいに参拝する。幟りの一本には、「市神大明神　弘化五（一八四八）戊申歳正月十日　当駅商人中」とあり、もう一本には嘉永六年（一八五三）の記銘があるから、その頃から、この市神は鮎貝の商人の信仰を集め、初市が盛大に行なわれていたものであろう。

一月十一日

稼ぎ初め

朝早く起きて堆肥とわらを小さく束ね、背負って「アキ」の方角の田或いは畑に置いてくる。これを「肥背負い」という。そのあと、藁を打って「ノサ」作りをする。数はその家の男の人数だけで、作ったら生紙・こんぶ・松を青苧糸で縛りつけるとノサは出来上る。入浴して体を清めてからノサを持って山の神に納めてくる。滝野ではこのとき、鉈で切ったとり餅も一緒に供える。山の神神社のない地区では、大きな杉の木などを山の神にみなして、その木にさげてくる。ノサを納めたら、帰りにアキの方を向いて「若木」を少し切ってくる。木は雑木で、何の木でもかまわないが、楢が多い。その若木は、十五日のだんごをゆでるときに焚く。

杉沢地区の若木切りでは、楢と栗を切ってくる。栗の木は、十五日にだんごをさげるのに用いる。

ノサ納めが済んで帰る頃、家では正月に家の各所に供えた「とり餅」を焼いて待っている。この餅を、「力餅」とか「歯固めの餅」と呼ぶ。

力餅を食べてまた一仕事をする。荷縄ないである。一本二四尺（七・二メートル）のものを五本作るのが、この日の一人前とされている。

一月十三日

荒砥の初市

荒砥の初市にも、団子の木が売りに出される。赤い芽をつけた「みずき」が、真白な雪の上に並べられると、街中が一段と美しくなって、初市の人々の心を浮きたたせた。上町から長屋にかけて、出店が一杯になった。

上町八幡門前の市神の祭日も、この日である。「西宮大神宮」と書いた真赤な幟が、何本も立ち並ぶ。現在でも、市神周辺の数軒でお祭りをする。

一月十四日

松おろし

正月に飾った松を全部おろし、三ヵ所に男結びをかける。それに、切り餅を入れた「あずき粥」を供える。供えるとき、箕和田・十王では「サンバイ上れ」、荒砥貝生では「たんと上れ」、大瀬平田では「おかえまいり」と、それぞれ三回繰り返し唱える。

松をおろす時刻は部落によって異なり、朝のところも、夕方のところもある。十五日におろす地区もある。

中立迎え

栃窪では、十五日の「おさいと」の中心に立てる中立（なかだて）迎えをやった。部落の上・下二組の中から、数え年十五才になった者を選んで大将とし、中立にする木を切ってくる。中立を迎えてきた子どもたちには、「ふきどり餅」（黄粉餅）を作って食べさせる。

十四才以下の子どもたちは、手分けをして、干し草・わら・豆殻などの「燃えくさ」を各戸から貰ってきて、翌日の「さいと焼き」の準備をする。子どもたちは、自分たちが迎えた中立と集めた燃え草で、明日のヤハハエロ（さいとうやき）がどんな風に出来上るかを想像して、心をはずませるのである。

一月十五日

あかつきがゆ

早朝、まだ鳥が鳴かないうちに起きて、小豆餅を入れた粥を作る。これを「あかつきがゆ」という。このときの餅を顔に塗るか、残しておいて夏分食べると、蜂に刺されないと言われている。この粥を、おろした松に供える家もある。

十五日を「あとの正月」という。元日の正月と対比しての言い方であるが、簡単な言葉の中に、正月のあり方の変化が示されている。「あとの正月」には、以下に述べるような大きな行事がぎっしり詰まっている。これは、正月の中心が十五日であったことを物語るものである。では何故十五日になるのかと言えば、満月だからである。かつて、月の満ち欠けを見て月日の経過を知った人々にとって、十五夜は重要な日であったに違いない。それが暦の普及と共に、一日に正月が始まることになり、公的には一日正月が用いられたが、民衆たちは長い間の習慣から抜けられず、以前として十五日正月を守り続けてきたことが、十五日に大きな行事が残っている原因であり、十五日が「あとの正月」と言われる理由でもある。では、十五日にどんな行事があったのだろうか。

田　植　え

十一日に背負った肥を撒きちらし、そこに田植えの真似をする。雪の上に、わら・豆殻・萱を一緒にして、その年の月の数だけの株数を植える。植えるときは、アキの方を向いて植え、終えたら近くの木や雪の上に藁を撚ったものを掛けたり、立てたりして鳥除けの呪いにする。

だんごさげ

この日の午前中に、だんごさげをする。鮎貝地区は十日に、荒砥地区は十三日に初市から買ってきた「だんごの木」の赤い芽を、前日子どもたちにもぎ取らせておき、その木を恵比須棚近くの柱に結びつけてから、だんご

を一つずつ丁寧にさしてゆく。

だんごの中に一六個だけ大きいのがある。「十六団子」と呼ばれる。十六団子の他、「ふなせんべい」で作った俵・恵比須様・大黒様・狐（お稲様のお使い）・打出の小槌など、色とりどり下げる。だんごの木の元には、縄・手織りの「かごまぶし」・「みご」に餅を小さく千切って付けた「まい玉」、縄に通した一文銭など、色々なものを下げる。

だんごさげは、稲作・繭の豊作を祈念する予祝行事であるだけに、地区により、家々により細い点の違いが見受けられる。違いの例を一、二あげてみると、

中山では、さげ残った団子を風の神と雷神に供えた後、家族全員がいただく。雷神には、夏の桑取りの際雷雨に会わないように拝む。

荒砥貝生地区では、下げた「まい玉」を、大田植のときつくる「たら」に入れる。また、団子の割れ具合で、その年の天候を占なった。つまり、割れるのが多いときは日照り、少ないときは雨年になると占った。

第２図：だんごさげ（佐竹清四郎家）

栃窪・深山には、だんごの木として、「はなのき」（もみじ）を使う家もあるし、杉沢では栗の木にさす。

大瀬の平田地区では、だんごの木をとってきたら庭にさしておき、家の中に入れて団子をさげたら、庭にはだんごの木の代りに、十一日の稼ぎ初めのとき切ってきた若木を立て、それにわら打槌・こもずっこなどをさげる。これはさげたものを茄子・胡瓜・果物などに見立てるもので、訪れた人はこれを見て、「こっちの家の胡瓜は随分大っけごどなー」などと賞めたてる。やはり、豊作の予祝行事である。若木にする木は、栗や楢の枝などである。

成木責めと火伏せ

だんごさげの団子を煮るときには、稼ぎ初めのとき切ってきた若木を、他の柴と一緒に焚くのが多い。団子を煮た汁を、李・桃・柿・杏などの果樹にかけると、その年は豊作になると言われている。汁をかけるときは二人で出かけ、一人が樹に向って「なるか、なれぬか」と鉈を振りあげながら問いかけると、もう一人が樹に代って「なりもうす、なりもうす」と答えながら、柄杓で汁を樹にかける。問いかけの言葉も杉沢では「ならざら、はさみ切る」、山口では「なんねどぶった切る」となるが、樹を脅すことは共通している。

第3図：成木責め

この汁は火伏せにもなると考えられ、母屋・蔵・木小屋など、すべての建物に少しずつかけてくる。だんごの木も火伏せになり、そのため小さな小枝にさしただんごを、春の火災期が過ぎる頃まで結わえておく家もある。

繭買い

十五日の午後、だんごさげが済んだ頃を見計らって、繭買いに行くところもあった。知りあいの家に「繭買いに来た」と言って訪ねると、喜んで酒を出して御馳走してくれた。

繭買いは、だんご木おろしの十八日にするところもある。女子衆が訪ねるときは、「繭かきに来た」という。その家では、黄粉だんごなど作って御馳走した。

ヤハハエロ（さいとう焼き）

正月に飾った松を焼く行事。夕方までの間に、中立を芯にして松を縛り、その周囲をわら・干し草・豆殻など

で包み、六尺ほどの「さいとう」をつくる。地区により、個人毎に作るところ、集団でつくる所とがある。

荒砥地区は集団で行う。この地区では十五才が大将となり、十四才と十六才は助大将（副将）となって大将を補佐する。

十五の大将がさいとうに上った頃をみて、火をつける。大将、助大将はさいとうを守ろうとして懸命になって火を消そうとする。頃合いを見て大将たちは「さいとう」から降り、本格的なヤハハエロが始まる。

さいとう焼きの炎が勢いよく夜空に舞い上がると、周囲の人たちは声を揃えて「ヤハハーエロー、目くそ、鼻くそ飛んでえげー」、「ヤハハーエロー、出もの、腫れもの、せんきせんばこ吹っ飛んでえげー」と叫ぶ。誰の顔も炎で赤く照り輝ぎ、若々しく見える。さいとう焼きの火をつけて煙草をすったり、その火で焼いた餅や団子を食べると、風邪をひかないとも言われている。また、焼く前に身拭き紙や書初めしたものを入れておき一緒に焼く。身拭き紙は病気にならぬように、病気の人は早く恢復するようにとの願いからであり、書初は字が上手になりたいという祈りを込めたものである。

第４図：ヤハハエロ……山口新地（槌谷謙滋郎氏提供）

さいとうが最後に倒れるのが「あき」の方だと良いと、言われているので、燃え切った頃を見て、手を貸して「あき」の方角に倒す。

便所の松は家の松とは別にし、小さなさいとうを作って焼く。

かせどり

ヤハハエロが終えると、子どもらは連れ立って「かせどり」に出かけた。黒鴨では菅のかぶりもので顔をかくし、「正月おめでとうございます」と挨拶しながら、各家々を廻り歩いた。訪問を受けた家では、銭や餅などを与えた。下山など川下方面では、「コッコッコ」と鶏の鳴き声を真似しながら、各家々を廻った。大瀬・平田では、籾通しに銭をしばりつけ、付木に祝いの言葉を書き入れて投げてやると、その中に銭や餅、だんごなど入れてくれた。夜が明ける頃まで廻り歩き、貰ったものは翌日一緒に食べ、楽しく一日を遊んだ。

虫送り、もぐら追い

黒鴨では十五日夜、ヤハハエロが済んでから、子どもたちが多勢で、「稲虫おくりー、稲虫おくりー」と言いながら、山の方に上って行った。帰ると親たちから小遣銭を貰えたもの。また、わら打木槌を縄で縛り、家の前を引っ張って歩いた。もぐら追いである。「わら槌様のお通りだ。えだもの（居るもの）ひっ潰すぞ、やーほ、ほーい、やーほ、ほーい。」と掛声をかけながら引いて歩いた。家によっては、土間を槌で叩くところもあった。

洗濯竿隠し、納豆鉢かくし

栃窪では、十五日の夜洗濯竿や納豆鉢をかくす風習があった。翌十六日は「女の正月」で、女は休む日となっていることと関連した習わしであろうか。

一月十六日

女の正月

十六日は「女の正月」と言われ、男が食事の準備をして女性に食べさせる日で、男が早起きして女はゆっくり寝ていてもよいとされた。「地獄の釜の蓋もあく日」と言われ、一日仕事を休む、貝生では女たちが「繭買い」と

称してさげた団子を賞めながら、お茶飲みに近所を廻ったりもした。

鳥追い

十五日の朝田植えした場所で、田に鳥が来ないようにと、鳥追いをする。「ヤーホ、ハイホー、ヤーホ、ハイホー」と三回大声で叫んで追う。朝早く追わないと、他所の田から追われた鳥が、全部集まってくると言われ、出来るだけ早くするのがよい。掛声の他に、貝生では「山形の鳥は足袋はいて踊る、仙台の鳥は袴はいて踊る、ここらの鳥はセンチン（雪隠で便所のこと）の尻の蛆拾いまくらってサーホイノホー」と手を叩いて鳥を追った。萩野も似た唱言があり、「あちらの鳥は足袋はいで踊る、こちらの鳥は米をまくらって立てども立てない鳥だ、ヤーホイホイ、ヤーホイホイ」と追った。

菖蒲ではこの日、十五日に搗いた餅を「鳥追い餅」として食べる。食べるとき、納豆をつけてはいけない、と伝えられてきた。

一月十八日

おふくでん

大瀬の平田部落では、男たちが十五日の夜から川端の家に宿をとり、そこにお籠りして、湯殿山・月山・羽黒山の出羽三山を祀り、川の水を浴びて行をした。十八日に帰宅するが、家では「お日待」で、精進である。大きな「いただき」（おかさね獣）を食べる。お供餅をたべるのは、他の地区も同じである。鏡餅・お供餅を「ふくで」、「ふくでもち」という地方は広いから、そうした餅を食べる日であったのであろう。

下山では、この日に縄をない、その縄は蚕室の棚を結ぶとき使う。

この日の夕食後には、食器・鍋釜を湯できれいに洗い、洗った湯を捨てずに家内中で分けて飲む。これを「き

りみがき」という。「きりみがき」する日は、この日以外にもある。

だんご木おろし

一般には、この日にだんごの木をおろす。養蚕家ではだんごをもぎ取ることを、繭かきに見立て、この日の来客には黄粉だんごなどを作って御馳走した。

もぎ取っただんごは、冬季間の子どものおやつになり、煎って溜りだんごにして食べた。だんごの木は小さく刻んで焚いたり、子どもたちが鍵をつくって遊んだりした。火伏せのため、春先まで団子をつけたまま少し残しておく家もある。

一月二十日

二十日正月

一日仕事を休む。この日、だんご木おろしをする所もある。滝野では、おろした木からもぎ取った団子は、繭と同様に「わらだ」（蚕座）に入れておく。

この日に蚕室用の縄を三〇尋（ひろ）（五四メートル）、馬方衆は草刈縄三〇本なうもの、と定めている所もある。

正月行事は、二十日正月で終る。

一月二十三日

三夜まち

一月二十三日の夜、若衆達が木小屋に集まり、縄ないをした後、豆腐汁を作り、持ち寄ったものを肴にして、みんなで酒を飲みながら、月の出を待つ。月が出ると一同で拝んで解散した。

お月待ちは、各家庭でも行なわれた。栃窪の場合は、一日精進で、夕方早く風呂に入って身を清め、神様に御

飯を供えて拝み、夕食後「きりみがき」をした。二十六日には「六夜まち」を行なった。

一月二十八日

おはちにち

中山ではこの日を「おはちにち」といい、魚と御神酒を供えた。この日に陽を拝まないと、翌月の六日まで拝めないとも言われている。栃窪でも以前は、二十八夜を祀ったという。

一月三十日

年祝花市

鮎貝ではこの日、年祝に使う島台を売る市がたつ。年祝いのある家の人たちが来て賑わう。この日、年祝いの松迎えをする。

2　春の行事

二月一日

年祝い

年祝い、年なおし、年かさねなど色々な呼び方があるが、男は五・七・十五・二十五・四十二・四十九・六十一・七十七・八十八・九十九才、女は三・九・十三・十九・二十三・三十三・四十九・六十一・七十七・八十八・九十九才になると、正月と同様に松を飾り、餅などを搗いて祝う。これが年祝いであるが、四十九才までは年なおし、年かさねの性格で、六十一才以後は年祝い的なものである。年なおしとは、男女共に厄年と言われる前記

の年令に達したとき、正月以後最初の朔日（ついたち）にもう一度正月を迎えたことにし、一ヶ月で厄年が過ぎたことにするものである。年なおしのうちでも、男四十二才、女の三十三才には親族衆を招き大祝いをする。神棚には松や島台を飾り、餅をつき、賑やかに祝いをする。それ以外の年直しは簡単で、友人を呼ぶ程度で、殆ど家内中だけで祝って終る。神棚に飾った松は焼き、島台は神社などに奉納してくる。

年なおし、年祝いには様々なことが言い伝えられておる。大祝い前は親にやってもらうもの、大祝は自分でやるもの、六十一の還暦以後は子どもにやってもらうものなどとか、女の十九の年祝いは雪隠でやれ、などとも言われている。年なおしの方は、最近比較的簡素になったが、年祝は長寿の祭り的色彩もあってか、以前とあまり変っていない。

年祝いのうち、七十七才は喜寿の祝いと言い、八十八才を米寿という。八十八の年祝いのときは、生紙に「米」と書いて知人に配る。これを米櫃に貼っておくと米に不自由しないと言われており、この紙を「米（よね）の守（まも）り」という。

二月初旬

初　午

二月最初の午の日を、初午という。この日は休みで、一般には蚕の祝い日のように考えられ、西高玉瑞竜院にある稲荷神社にお詣りして、その年の養蚕の安全祈願をした。また各家々では、黄粉団子をつくって「オッシャ神」にも供えた。大瀬平田や山口ではこの日、「繭買い」に歩く人たちもおり、「後蚕（あとこ）の祝いだ」などと言っては酒を飲みあっていた。初午には機織りをしてはいけないとか、お茶を出してはいけないというタブーがあり、それを破ると火事の火元になるとも言われている。

みずのえたつ

二月最初の「みずのえたつ」の日に、長井市東五十川の鈴木家にある宥日上人産湯の井戸から汲んだ水は、火伏せになると言われ、この水を汲んできて、屋敷中の建物にかけ、火災の予防を念じた。

二月八日

からすぼたもち

この日は疫病神がさわぐ日だから、遠くに用達に行くなとか、正月礼のおくれがあってもこの日は行くな、と言って一日休みにする。各家々では「こともち」（ぼたもち）、「ことのだんご」、赤飯などを作り、「ことさま」、「ことの神」に供え、後で烏に食べさせる。烏に食べさせるとき、「烏、烏、小豆まんま食だからば、ごうき（食器）と箸持ってこい。」と唱えながら、千切って空に向って投げてやる。菖蒲では、「烏、烏、あもんと食ったら食（か）せんべ。」、などともいう。それでこの日のぼたもちのことを、「からすぼたもち」と言う。

「ことさま」のことは、仕事、正月行事、よい事など、様々に言い伝えられており、栃窪のように、「こと」を仕事、良い事と考えている所は、この八日を「こと始め」といい、菖蒲のように、正月行事と考える所では事終り、事納めとも呼んでいる。

初　灸

平田では、家中の者に皿灸をたてた。皿灸とは、頭の上に皿を伏せ、皿の小尻に灸をすえるもので、疫病神にとり付かれないためと言われている。

大般若

滝野は大蔵寺で、菖蒲は薬師堂で、といったように、各部落それぞれの場所で「お大般若」をやり、その時の

祈禱礼を部落の中央、村境などに貼って、厄除けとする。

厄神除けの草履

上杉沢山の神組の菅間一族では、この朝カッツァわら（打たないわら）で、大きさ一尺位の「エボコ草履」に似たものを作る。これになんばん二個を挟み、塩を振って清めてから、入口の木にゆわえつける。草履は片方だけである。厄神除けのためと言われている。現在は、新暦二月八日にする。

第５図：畔藤，菅間家で飾る草履

二月十五日

年祝いの松焼き

正月行事と同じように、前日の十四日に松をおろし、年祝いのあった近所の松と一緒に、十五日の夜、小さな「さいとう」を作って焼く。

お釈迦のお涅槃（ねぼん）

お釈迦さまの入滅の日で、各寺々で法会が行なわれる。お涅槃に子どもらは、きまって寺に集まった。そこで、お手玉や手まりをついて遊んだ。「お釈迦さまの　梯子の下で　手まり売りゃる　てまりなんぼだ　二十と五文五文にまけろ　まけらんね　まける嫌なら　一丁かしもうした」という手まり唄は、こんな時よく唄われた。寺でまく団子を拾うのも楽しみの一つで、この団子はその年の蜂や毒虫の害を除いてくれると信じられている。

二月十六日

オッシャ神の祝

オッシャ神は「おしら神」で、蚕の神である。この日は餅を搗き、蚕の種紙に豆の粉を敷いた上に餅を置いたりして供える。蚕神は、この日杵の音が聞えたら馬に乗って降りてくると言われているので、なるべく朝早く搗くのがよいとされ、早朝から餅搗きが始まる。

この日降りてきた蚕神は、十月十六日の餅を食べて山に帰り、山の神になると言われており、蚕の神と山の神は春秋交替する。また、蚕の頭部についている蹄形の模様は、蚕神が乗ってくる馬の蹄の跡とも言われている。

二月十七日

山の神の日

一月・二月・三月の十七日は、山の神が山の木を数える日で、この日山に行くと木と間違えられて数え込まれるから、山に行ってはいけない日である。男衆はノサを作って山の神に納めてきて、一日山仕事を休む。貝生地区では酒を持ち寄り、山の神の別当の家で酒盛りをした。このときは、料理一切男だけで作り、女は手をかけない。蚕桑地区では母屋を使わず、木小屋などの別棟でやり、この日の行事を「オトキ」と呼んでいる。また、浅立地区では、朝各戸が小豆御飯を炊いて神棚に供え、部落中寄って山の神の御宣託を受ける。御宣託の内容は、その年の作柄状況はじめ、生活全般に亘っての吉凶である。御託宣を受ける日は、その後新暦三月十七日となり、更に四月十七日に変った。

三月三日

三月節句

二日の宵節句に桃の枝を取ってきて徳利にさし、家中で桃酒を飲む。飯豊町中津川地区では、桃風呂をたてて入るが、桃酒・桃風呂とも、桃が持っていると考えられている不思議な力によって、身を清めるためのものであ

ろう。三日の節句にはもぐさ餅をつき、神仏に供える。家によっては女の子のために雛壇を飾った。初節句を迎える女の子がおれば、何か作って家内だけで祝ってやった。

嫁や婿は酒や餅などをもって、実家に節句礼に行く。

荒砥街内の人々は、この日御馳走を重箱に詰め、十王称名寺の不動山に出かけて楽しんだ。これを遊山と呼んでいた。子どもたちが、春先に弁当をもって土手などで食べるのを「ゆさん」といったのも、こうした大人の行事からきたものであろう。

三月下旬

社　日

社日は「ごく菩薩」が生れた日だから、穀類をつぶしたり、混ぜ御飯を炊いたりして御飯をよごしてはいけないとされ、この日は団子・ぼたもちなどは作らない。社日が彼岸にかかることもあるが、そんなときは、団子をつくる日を替えなければならなかった。社日が彼岸にかかる年は、山仕事に注意しないと怪我をするとも言われている。

馬づくらい

春の土用の入りの日に、馬の手入れをする日である。馬を牽いて馬場に集まり、伯楽（はくらく）（獣医）に爪を切って貰ったり、古血を取ってもらったりする。それが済むと皆で餅米一升、酒一升持ち寄って慰労をする。この日は昼、夜二回餅を搗いて食べた。この行事の宿は持ち回りで、農家にとっては大きな行事であった。

春の彼岸

彼岸の入りには、「彼岸花」（造花）を買って供える。彼岸に入ると、毎朝お菜を作って仏様に供えた。彼岸の

中日には、ぼた餅をついた。「にちばん」（彼岸の末日）には、団子をつくって仏送りをする。このときの団子は餅米だんごであるが、これは仏様が三途の川を渡る時、水によく浮く餅米団子に乗って、無事彼の岸に着けるようにするのだという。また同様の考え方で、「にちばん」にはお茶を出さない。川の水が増して、渡れなくなるからだという。仏送りの団子を大瀬・平田では、「おみやげ団子」と呼んでいる。

彼岸の七日間には様々なものを仏様に供えるが、略きまっているのは、あけびの皮の煮物・かんぶれ餅・とこわか・ふきわかなどである。あけび皮は舟に見立てられ、仏様がこれに乗ってくるのだと言われ、かんぶれ餅は正月に搗いた餅にかびが生えたもので、仏様の好物と語り伝えられている。とこわか・ふきわかは、中日の朝、大根いりなどに混ぜて供えるもので、ぎすぎすの若芽とふきのとうである。かぶ漬を供えるところもある。

彼岸礼は本家と新家のような極く近親間に行なわれ、大抵そうめん・線香などを持って仏様を拝んでくる。

彼岸の中日に「わか」（巫女）に行って口寄せ、仏遊ばせをする人もいる。死んだ人の霊を呼び出して話を聞いたり、その年の吉凶を占ってもらったりする。

3　夏の行事

四月十六日

川祭り

箕和田では、この日川祭りを行なう。宝暦の初め（一七五〇年頃）、最上川の洪水で箕和田地区の田圃が一面水をかぶったとき、瑞岩寺のたんりう和尚が竜を彫って川に埋めたところ、忽ち水が引いて、箕和田部落は危く難

を逃れることができた。それが四月十六日であったという。そのたんりう和尚が死ぬ時、四月十六日には必ず川掃除をするように部落民に遺言をしたので、今でもそのことが守られ、この日に川掃除をして、たんりう和尚の碑前でお祭りをする。

四月十七日

高い山

この日に高い山に登ると願いごとが叶うと言われ、当地方では虚空蔵さま（白鷹山）に登る。白鷹山は頂上に虚空蔵尊をいただく東西置賜、西南村山各郡にわたる名峰で、役行者の開山とも言われ、古くから当地方の民衆の信仰をあつめてきた所である。特に、養蚕守護の神として信仰されてきたから、高い山当日は置賜、村山両方面から登る人が引きも切らず、その列は麓から頂上までも続いていた。

頂上には、村山方面から来た桑売りがいた。高い山で買った桑を神棚に供えておくと、春蚕が当ると言われていたからである。

頂上ではまた、春蚕時の蚕手伝いの労働契約もなされたという。村山方面から置賜方面への出稼ぎである。

この他にも、わらび汁を売る店などがあって、頂上はごった返しの賑やかさで、別当大蔵寺はこの日のお賽銭を叺（かます）で何俵も背負いおろしたと言われている。

高い山の日は夕方必ず雨が降ると言われ、これを「おみさか流し」と呼んでいる。貝生ではこの日を、「丑開く」とも言った。

現在の高い山は、新暦五月十三日である（第六章第五節第1項参照）。

五月四日

宵節句

五日は五月節句である。宵節句にはその準備として、昼間は笹巻や「なたまき」を作ったり、夕方になると菖蒲と蓬（よもぎ）を各出入口の軒場にさしたりする。菖蒲は風呂にも入れ、菖蒲湯にして入って体を清める。夕飯のときには、「鬼の牙」（あさづきの鱗茎）に味噌をつけて食べる。

五月五日

五月節句

休み日である。先述したように「節句代を掻くな」（第六章第五節第1項）というタブーの通り、この日は働いてはいけない日であったから、代掻（しろか）きばかりでなく、他の事も禁じられ、禁を破る者がおれば「道楽者の節句働き」と嘲笑された。

笹巻は節句には欠かせない食べ物で、黄粉（きなこ）をつけて食べた。菖蒲では砕け米でもぐさ餅を搗いたが、この餅を「ハット餅」とも言った。砕け米でも何米でも、隠し米と見られるものはすべて御法度であった藩政時代からの、悲しい名残りでもあろうか。農民は僅かの砕け米、屑米ですら節約しようとして、それにごんぼ葉などを入れたりして搗いたもの。

五月初旬

田植行事

田植えは農民にとって、最も重要な農作業である。稲作の出来不出来は家族全部の生活を左右するものであるから、田植えに際しては、様々な形での豊作祈願が田の神に対して行なわれる。

（イ）田うなえ餅

田をうない終えた日に、餅を搗いて神様に供える。これを「田うない餅」という。菖蒲周辺では、田うない（あらおこし）の時期判断を、川向いの今平山の雪の形でする。今平山に雪が一文字に残った時が適期とされたので、「一の字田うない」といい、更に季節が進んで、一文字の中央が切れ、八の字型になると「ハト豆まき」といって、豆蒔きの適期とした。

（ロ）苗開き

苗の移植は、種蒔した日から四二日目がよいと言われているので、この日に苗を二把ほど取り、田の神に供えて苗開きをする家もある。こうすれば、この後は日を見ないで、いつ植えてもよいと言われている。

一般には暦を見て、よい日を選んで植え初めをする。植え初めの夕飯の膳には、「たら」（俵の意）がつく。朴の葉に豆いり・切り餅・とうきび・にしんなどを入れて、それを藁で苗むすびにむすんだものを一俵（一包み）ずつ配る。「えんぶり摺り」をした人には、二俵配られる。また、萱を一尺八寸（五四センチメートル）に切ったものも添え、これを箸にして御飯を少し食べる。これは、稲の丈がよく伸びるようにするものという。これが苗開きの行事で、苗取り・田植え手伝いの人も全部招かれて御馳走になる。

（ハ）大田植

植え初めの苗開きに対し、田植えの終えた日が大田植である。この日の行事は苗開きと同様であるが、家によっては苗開きを簡単にして、大田植えのとき賑やかにするところもある。

鮎貝八幡地区では、五升枡に前記の「たら」二俵、苗二把を入れて田の神に供える。田の神は、恵比須棚に祀られている。菖蒲地区では、五升枡に朴の葉を敷き、その上に御飯をのせ、鎌で切った若布（わかめ）を鎌と共に入れて田の神に供える。この若布は、後で男衆だけで食べる。貝生ではこれらの他にお頭付き（いわし）も供え、これは

田ならしをした人が貰うことになっていた。供えた苗は川に流す。

このように、大田植えの夜の供物などについては、若干の違いはあるにしても、田の神への豊作祈願の心は変ってはいない。苗開きから大田植まで、「苗枯れしないように」と食前には風呂に入らないというのも、そうした気持の現れであろう。

(ニ)サナブリ

大田植の翌日が「サナブリ」で、餅を搗いて神様に供えたり、家内中も食べ、その日一日休みとなる。

「サナブリ」は「サノボリ」の転訛で、「サ」即ち田の神が天に帰る日である。田植えのため天降って来た田の神を、送るために仕事を休むのであるが、本来の意味が薄れて、田植えの慰労休暇のようになっている。「サナブリ」に対し、田の神が降りてくる日を「サオリ」といい、苗開きの日になる。この地方では「サオリ」という言葉は消滅してしまったが、東海地方以西にはまだ残っている。

(ホ)お葉山詣り

田植えの終えた後、貝生の葉山神社または長井村白兎（しろさぎ）（現長井市白兎）の葉山神社に参詣に登った。その時苗を持っていって、神社の沼地に植え、その年の豊作を祈願してきた。

養蚕行事

五月初旬は、忙しい時期であった。田仕事と並行して、養蚕も始まっているからである。養蚕は当地方にとっては最も重要な現金収入源であったから、どの農家も真剣に取り組んだ。しかし、現在と違って飼育法の研究も不十分であったから、遺蚕を出す例が多く、そのために莫大な借金を背負うことも珍らしいことではなかった。従って、ここにも神の力に頼らねばならない背景があった。田植行事同様養蚕行事は、養蚕の折目折目に蚕神（オ

ッシャ神）に繭の豊作を祈念するものに他ならない。

（イ）「ふなだんご」と「にわおきぼたもち」

春蚕の掃立は、暦上の小満が目安となる。旧暦なら四月下旬、新暦なら五月下旬である。掃立てのときには「養蚕安全神」と書いた掛図を床の間にかけ、酒・切もち・豆いりなどを供えて拝み、蚕の安全を祈願する。

蚕は上簇するまで、五令を経なければならない。各令の間を順に、「ひとつよぞみ」、「ふたつよぞみ」、「ふなよぞみ」「にわよぞみ」という。令が進むにつれ蚕は大きくなり、食べる桑の量も多くなるから、桑取りが忙しくなる。「ふなの田植え」という言葉があるように、以前は四令頃に田植えが始まるのが普通であったから、養蚕の最盛期と田植えが重なり、全く猫の手も借りたい忙しさであった。蚕が「ふなよぞみ」に入ると、「ふなだんご」を作って蚕神に供えた。次いで「にわよぞみ」に入り、蚕が眠りからさめると「にわおきぼたもち」をつき、蚕神に供えたり、家中の人も食べて最盛期の忙しさに備えた。

（ロ）「ヒキ餅」

五令を過ぎ熟蚕になると体が透き通るようになり、そのままにしておくと勝手なところに繭を作るので、一匹ずつ拾って「まぶし」の中に入れ、そこに繭をつくらせる。熟蚕を「ヒキ」というので、「ヒキ拾（しょ）い」という。数百枚のわらだの蚕が一斉に「ヒキ」るので、拾って「やといをつける」（ヒキをまぶしに入れる仕事）には、どうしても十人前後の人手が入り用である。だから手伝いの人が必要となる。「ヒキ拾い」は女、「やといつけ」は男の仕事になっているが、この日は一日立ち通し、働き通しなので、元気をつけるため、男衆には昼食にも酒を出した。御飯は大抵、「ごまやきめし」（おにぎり）であった。夜は夜で「ヒキ餅」を搗き、男衆には酒を、女衆には甘酒を出して大祝いをやった。

(ハ)蚕　餅

「ヒキ」をつけ終えてから繭かきが出来るようになるまでの間にも、温度の加減やら菰抜きやら、何かと手がかかる。それだけに、形のよい繭が「えびら」一杯つくられたのを見るのは、嬉しいことであった。だから、深山では繭かきが終えたときは「たまり餅」をついて喜び、旦蚕神に感謝した。金が溜るようにという願いも込められているのは、言うまでもない。

繭かきが済めば、器械にかけて「繭むき」をする。表面の、ばさばさした糸を取る作業である。それが終ると、選別して良品を売ってやる。これを「繭送り」という。一ヶ月に余る労働の成果が、具体的な形で現われる時である。

繭送りが済むと、それぞれの部落が相談して「蚕餅」にする。この日は餅を搗き、桑取り・ヒキ拾い・やといつけなどで手伝ってくれた人たちを招いて御馳走し、旦賃金を支払って総決算をし、一日休みとなる。蚕餅の頃は、もう五月も末になる。

六月一日

ムケノツイタチ

六月一日を「ムケノツイタチ」といい、虫や人の皮がむけ替る日だから、皮のむけ易いものを食べるとよいと言われており、新しい「からいも」（馬鈴薯）を掘って食べたり、とろろ芋を食べたりした。「つるりとむけるように」、との意味だという。

この日はまた、氷を食べるとよいとも言われ、氷売りなどが触れ歩いた。

六月上旬

お半夏（はんげ）

この日酸味の強いものを食べたり、丸いものを食うと頭が禿げると言われ、梅やぐみは食べない。

お半夏はまた、荒砥八幡神社の「半夏まつり」の日で、祭りに出る獅子舞が街中を上るときの勢がよいと、春蚕の繭値や生糸の相場がよいと言われてきた。

六月下旬

土　用

植物が、最も繁茂する季節である。この頃、山野に自生するどくだみ・おとぎりそう・げんのしょうこ等の薬草を採り、陰干しにして保存しておく。どくだみの葉を風呂に入れて入ったり、ひょうを取って入口に下げるのもこの頃である。

栃窪では土用の丑の日に、稲虫送りをやった。夕食をとってから若衆たちが集まり、太鼓を叩いて前坂の六地蔵下まで送って行った。大正末期まで行われた。

4　秋の行事

七月七日

なのかび

山口地区では、六日の午後から近くの川端に小さな小屋をたてて泊り、翌日朝早く水浴びをやった。横田尻地区では子ども達が数人で一軒の小屋を借りて泊り、六日の午後獲った魚や野菜を持ちよって自炊し、夜は皆でト

ランプをしたり、昼間とってきた青竹に、最上川・北上川・天の川などと書いた短冊を下げて七夕を作ったりして過し、十二時が過ぎると、真暗な中を七夕（たなばた）・五つ葉豆の葉・ねぶたの木（ねむの木）などを持って最上川に出かけた。

川に着くとまず七夕を流し、ついでねぶた、豆の葉を川に流した。流すとき、「ねぶた流れろ、豆の葉止れ」と唱えた。その後で川に入って水浴びをし、寒くなれば岡に上って火に当り、温まれば亦水浴びをした。周囲が薄明るくなる頃、帰ってきた。

お盆の準備

お盆（盂蘭盆会の略）の準備が始まるのも、七日である。

七日の朝仕事に、お墓掃除をする。お墓の草をとり、墓参りに使用する墓座をのせる台を作っておく。

盆箸を取るのも、この日であった。川原に行って柳をとり、皮を剥いで柱にしばりつけて十三日まで干しておく。また「ガツゴ」をとってきて墓座も編んでおく。盆箸取りや「ガツゴ」刈りは、子どもたちの役目であった。

七月十日

盆花迎え

お盆の準備の中で、子どもらが受け持つものに盆花迎えもある。川原に行って盆花（みそはぎ）を迎え、山に行って黄色の女郎花（おみなえし）と、白色の「おことえし」とを迎えて、十三日の墓参りまで手桶に入れておいた。十三日の墓参りのときは、これに桔梗も加えた。

七月十二日

盆棚作り

仏壇を掃除して、盆棚を作る。まず、下げるものは、お盆りんご・八寸ささぎ・そうめん・こんぶ・ほおずきの五種類で、供えるものは夕顔・瓜など季節のものの他菓子など適宜である。壇を作り、「盆ござ」を敷いて、その上に供物をのせる。お盆提灯と呼ばれる「ぶら提灯」を下げれば、盆棚も出来上る。

七月十三日

墓参り

夕方早目に入浴し、浴衣に着替え、「お盆下駄」を履いて家中揃って墓参りに出かける。盆花・線香・お茶・蓮の葉に包んだ供物・墓座・サッツァ皮・提灯など、それぞれ手分けをして持って行く。墓に着くと、まず供物を供える。七日朝作った台の上に墓座をのせ、それに蓮の葉（里芋の葉を代用することもある）に包んだ供物をのせる。供物は、墓まんじゅう・うり・青豆・なすなどである。線香を墓毎にたてながら、生前の思い出話が極めて自然にでてくる。近くに親類縁者の墓があれば、そこにも線香を供えてくる。線香を配り終えると一同で合掌し、供物の墓まんじゅう・瓜・豆を「べっとう」（食べること）した。その後で、サッツァ皮を焚き、その火を提灯のろうそくに移して家に帰る。栃窪では、墓場に行くとき松明（たいまつ）を持っていったという。十王では帰りに、寺に寄ってお盆礼を済ませてくる。

墓参りの連中が家に着くと、深山では留守番の人が常口でサッツァ皮を焚いて迎えた。常口で迎え火を焚くことは多くの部落に見られるが、焚かないところもある。迎え火を焚くサッツァ皮は、見つけたとき取って保存しておくものである。

家の中に入り、提灯の火を仏壇のろうそくに移し、線香をつけて合掌すると仏迎えも無事終了である。この後に迎え火を焚く家もあり、迎え火の代りに常口に提灯を下げるところもある。大瀬の平田部落では、「がんどう」

（灯芯で油をともし、周囲に紙を貼ってある。）を長い「ほそぎ」の先に下げて常口に立てておく。

七月十四日

お盆礼

朝餅を搗く。家内中の一人一人へ七日に取ってきた柳のお盆箸（柳箸ともいう）を配り、その箸で食べる。箸は食後、川に流す。仏様の膳の柳箸は、そのままにしておく家もある。

この日から、お盆礼の行来がある。大抵砂糖・そうめん・うどんなどを持っていく。量はうどんなら五把程度である。「仏様が帰らないうちに」と言って、十四日、十五日の両日中に終えるようにする。

七月十六日

送り盆

栃窪・黒鴨などでは、かつて十五日に仏を送ったというが、現在は一般に十六日である。

仏送りのときは、団子・花・線香・お茶それに、仏壇の灯を移した提灯をもって墓参りに行く。仏送りの団子は、彼岸の墓だんご同様餅米だんごを作る。黒鴨では、お茶は葉茶を用いたという。葉茶とは、お茶の葉を紙にのせて供えるもので、これは餅米だんごと同じく、仏様が帰られる時水増しにならぬよう、お茶に水を入れないのだという。この日は家でお茶を供えるにも、葉茶のまま供えた。

七月二十日

二十日盆

鮎貝では、盆おどりがあった（鮎貝小嶋家文書）。最近はどこでもやっているが、第二次大戦前は殆ど見られなかった。お盆の休みもこの日で終る。

八月一日

八朔

この日ぼた餅をつくり、青萱の箸で食べる。「青萱ぼたもち」という。黒鴨では、八朔までは萱の箸で食べてはいけないという伝承があるが、これはこの日まで萱の刈り取りを禁止したものとも考えられ、八朔が収穫と関連ある行事であることを立証する。

風祭り

二百十日の前日に、風祭りを行う。栃窪や黒鴨では、新しい米をむいて御飯に炊き混ぜて神棚に供え、その後部落各戸から一名ずつ山の神前に集合、風の難のないように祈願した。稔りが充分でないときは、穂を神棚に供えた。他の部落では、神主や寺院から風祭りの札を貰い、田の水口に立てて、この季節に多い台風の被害のないように祈願した。

八月十五日

第６図：風祭りのお札

豆名月

外戸を開け、縁側に小机を出して、それに豆をのせて名月さまに供える。名月さまへといって、床の間に供える家もある。そのあとで、家内中で青豆を食べる。

からばち灸

荒砥の通称「しもふじや」（長谷部家）では、豆名月の夜、家族全員が「からばち灸」をすえてもらった。この灸のたて

方は、まず外戸を開けて一人ずつ名月に向って坐り、頭に「からばち」（摺鉢）をかぶせてもらう。灸を立てる人は摺鉢の小尻に灸ぐさを置いて火をつけ、全部燃えつきたら、「ネキセ、ハキセ、ヤマイキセ」と唱えながら、薬指で消す。頭病(や)みしないための灸と言われている。

九月九日

ミクニチ

九月九日、十九日、二十九日を合せて「ミクニチ」という。菊の節句である。菊の花をもって、近くの観音様などにお詣りに行った。三日とも、餅を搗くと金持ちになると言われている。

九月十三日

芋名月

里芋を味噌で煮て、月の数だけ名月さまに供える。浅立では水煮した芋を月の数だけ入れて供え、一つだけ名月様に供えるとして川に流してやる。残りを喉はらししないように、家内中で食べる。

九月十九日

お水神のお祭り

お水神さまの秋祭りである。一般的には赤飯をして供える程度のものが多いが、山口地区では、杉の葉で水神さまの祠を建て替え、その前に「サラムスビ」と呼ばれるわらで編んだ器に赤飯を入れて供える。

九月二十九日

刈り上げ餅

「ミクニチ」の一日であるが、二十九日には刈り上げ餅を搗く。稲刈り終了時には「刈切(かつきり)餅」、稲始末が済んだ

時は「にわはたき餅」を搗くので、刈り上げ餅は農作業全体に係わるものであろう。「刈上げ餅」は「橋の下の奴（乞食）も搗く」といわれ、何処の家でもついた。また、この日から田の神が山の神になるとも言われ、山の神が供えてもらった刈り上げの餅を「くらべっこ」（比較）するから、大きくとれ、大きくとれといって、たくさん搗いた。田の神と山の神の交替に関連して、鮎貝ではこの日も、春の十七日同様木を切ってはいけないと言われている。

杉沢では、「カッキリ餅」には稲束二把を恵比須棚に供え、刈り上げには大きな餅を搗いて、その上に稲束をのせて供える。この大きな餅に、田の神が腰掛けて休むのだと言い伝えられている。

山の神を鎮守様としている所では、刈り上げの餅をもっていって供え、その端を少し切り取って残し、他を持ち帰る。

刈り上げ餅と初餅を、兼ねるところもある。

5　冬の行事

十月一日

刈り上げおろし

刈り上げに田の神（山の神）に供えた餅を、おろして食べる。これを、「刈り上げおろし」という。貝生では、山の神に供えた餅は男だけが食べ、女は薬師さま、不動様に供えたものを食べる。

十月十日

オタナサマの祭り

白鷹町山口・黒鴨・浅立などで、農家の納戸周辺に祭っている神様に「オタナサマ」とか「オトカサマ」と呼ばれるものがある。性格は産神・作神・盗人除けなどさまざまで、祭日も十一月八日、十日のところもある（詳細は第四節第2項参照）。

鮎貝西口地区などでは、この日わらで「シンベ」（シメ）を作って飾り、餅を搗いて供える。餅は、新家など近親者に配る。この日は大根、菜類は食べてはいけないと言われてきた。

十月十六日

オッシャ神の祝

蚕桑のお祭り。大抵餅を搗いて、蚕神に供えた。黒鴨では、祭壇には伏見・竹駒の稲荷神社や蚕神の掛軸を掛け、その前に、お膳に千切った餅を四つずつ四列と、お頭付きを供える。前述したように蚕神は、二月十六日降りてきてこの日天に上り山の神になると言われている。

十月二十日

二十日講

商人の祝日である。川から鮒などを獲ってきて、生きたまま恵比須棚に供える。荒砥では、塩引きの頭を供える家もある。

十一月十五日

百姓の祝

十五日講ともいい、農民の祝である。二十日講同様、生きた魚を神棚に供える。小作人は、この日までに小作料を納めるものとされていた。

秋　行（あきぎょう）

十五日の百姓の祝に、秋行をする家が多い。秋行にはその家から嫁・婿に行った人が泊りに来る日で、酒一升・米五升・塩引一本などのお土産を持ってきた。秋行は親が生きている間行くもので、嫁・婿がその年とれた米を持って行って親に感謝の意を表すものだ、と言われている。また、秋行には飽きる程泊ってよいとも言われ、嫁に来た人は、洗濯する線入れなどを持参で泊りに行った。なかには実家で織機を立てて貰い、「ほんまち機（はた）」を織る人もいたという。

十一月二十三日

お太子講

お太子講には、三太子と七太子とがある。三太子なら十一月一日・十三日・二十三日が祭りで、七太子なら一・三・七・十三・十七・二十一・二十三日の七日になる。深山のように七太子は祝うなとする所もあるが、二十三日はどちらにとっても重要な日である。お太子様は二十四日に帰ると言われており、この日には塩なし黄粉をかけた御飯を供える。塩を使わない理由として、お太子さまは倹約な神だからとか、お太子さまは塩を取る釜で足を火傷（やけど）したからとか言われている。黒鴨では黄粉御飯を「フキドリ」といい、栃窪ではこれを食べると賢くなるとも言った。

お太子講のときは二十四日だけでなく、三太子にしても、七太子にしても、それぞれの日にぼた餅、「ハット餅」、「ハットかい餅」などを作って供えるが、どの場合も塩を使わない。黒鴨では、楢の木箸を添えて供える。また貝生ではどんぐり殻程の小さな草履を編んで供える家もある。

二十四日の晩はいつも天気が荒れ、「オダイシアレ」と呼ばれている。太子さまの足跡をかくす、「跡かくし雪」

が降るとも言われている。

お三夜さま

霜月（旧十一月）の二十三夜は、三夜さまのお年越の日で、最も重要な三夜祭りの日である。殆どの家で餅をついて供え、夜おそく昇る月を拝んで床に就いた。神主を呼んで、祈祷してもらう家もあった。

十二月一日

「カビダレ餅」

荒砥・鮎貝方面で、砂利取りなどの川仕事をする人たちは、この日に餅をついて水神さまに供えた。この餅を「カビダレ餅」という。

「トフタテの朔日（ついたち）」

菖蒲ではこの日豆腐を切って串に刺し、いろりの四隅に立てて焼き、それを汁に入れて食べた。

十二月八日

ことのおわり

この日を「ことのおわり」とする所以は、「こと」の意味を「仕事」と考えておるようで、黒鴨では「ことの団子」をそば粉で一二粒作り、御飯に入れて煮る。それを床の間に供えてから、「鳥こい、鳥こい」と鳥を呼んで食べさせる。「鳥、鳥、小豆まんま、食だからば、ゴーキと箸持ってこい。」と言って餅を千切って投げ、鳥に食べさせる所も多いが、黒鴨ではこの文句は子どもらの遊びの中で語られるものになっている。

針供養

針箱に「とりもち」を供え、一日針仕事を休む。

十二月九日

耳あけ

大黒さまの年夜である。また、大黒さまの婚礼の日でもあるという。二股大根に紙とか朴の葉の着物を着せて、神棚に供える。

夕食後豆を煎り、一升枡に入れて「耳あけ」をする。神棚の前で「お大黒さま、お大黒さま、お大黒さま、耳を開けておりますから、ええごと聞かせておごやえ（よいこと聞かせて下さい）。」と唱えて豆を撒く。この所作を、三回繰り返す。栃窪の唱え言は「お大黒さま、お大黒さま、耳をあけて進ぜ申すから、来年はええごと聞かせておごやえ。俵とかますたんと積むように、銭と金たんと授けなしておごやえ」と変化があった。

耳あけが済むと、残りの豆を家内中で食べるが、枡から豆をとる時、一回で自分の年だけ摑むといいことがあると言われている。

十二月十八日

おみやこ

大宮講である。若妻たちの講で、子育安産を祈念するために、小国町の大宮神社を信仰する集団である（第四節第1項）。

十二月二十二日（新暦）

冬至

小豆南瓜を煮て食べたり、茄子の木を焚いてあたると風邪をひかないという。深山では、「十六冬至」、「十八土用」といって冬至は十六日間あり、冬至が「きしゃまる」（終える）と小寒になるという。この冬至の日には、「冬至さまに」といって床の間に小豆南瓜を供える。浅立菊地藤兵衛氏宅でも、同様「冬至さまに供える」といって、

小豆南瓜を盛った椀を盆にのせ、家の庭先に供えて拝む。冬至のもつ民俗的意味、つまり冬至には「冬至さま」と呼ばれている神の来臨を意識していたことを示す例として、貴重なものと言うべきである。

貝生地区では朝の小豆南瓜の他、夜には「冬至餅」を搗いて食べた。冬至餅は他所の人には食べさせないで、家内中だけで食べるものとされている。

十二月二十四日

煤（すす）掃き

正月を迎える準備として、家中の大掃除をする。煤を掃くためわら箒を作り、天井裏まできれいに掃く。箕和田では火棚の煤は「あき」の方に捨てる。大掃除終了後、わら箒は家の前に立てておく。小国方面ではこの箒を「すすはき男」と呼んでいる。

十二月二十五日

鮎貝の筆まち

鮎貝大町から内町にかけて、筆市が開かれた。筆商人は普通米沢から来たが、筆の他、雑貨・青物・干柿などが、山口・箕和田方面から売出され、人出で賑わった。

納豆ねせ

正月用の納豆を、自家製造するのである。大豆を煮てわら苞（つと）に入れ、炬燵に入れておく。喧嘩しながら納豆をねせると、糸が出なくなるとか、糸がよくでれば、翌年の蚕は上作だとかいう伝承がある。

十二月二十八日

門松迎え

山から、正月に飾る松を迎えてくる日である。松は双葉松で、三階松（枝が三段になっているもの）を迎えてくる。松の実が多くさんついているものや蔓のからんでいるのは金がつく、金蔓などといって縁起をかついで喜んだ。松迎えの人が帰ると、松を庭にたて、お神酒やするめを供えて拝み、迎えてきた人にも酒を振舞った。

餅搗き

正月の餅を搗く日でもある。この日は普通の餅の他、とり餅・砕け餅・味噌餅なども搗くので、四臼も五臼も搗くことになり、忙しい一日となるから、親族同士で「ヨイ」をするところもあった。

餅つきが終えると、酒を振舞うが、酒をのまないと、餅が亀の甲羅のように固くなるとも言われている。

白い餅は板の上に伸ばしておき、翌日か翌々日に短冊型に切り、わらで縛って正月礼のとき持ってゆけるようにしておく。

十二月三十日

松飾り

母屋では入口・神棚に大きな松を、その他仏壇・流し・裏口・織機・火棚などにも小さいものを飾る。母屋以外の蔵・便所・木小屋などの入口にも飾る。とり餅も飾る。

おみだま

年取りの夜、御飯を小さく翌年の月の数だけにぎり、五升ばん（五升枡）に紙を敷いて入れ、それに萱棒をさす。これを「おみだま」という。枡の中には、おみだまの他昆布・納豆なども入れておく。この五升ばんを箕にのせ、箕の口を「あき」の方に向けて座敷の隅の辺に供える。これは、歳徳神に供えるものである。

歳徳神は所謂正月の神で、松を依代（よりしろ）として降臨し、西高玉では正月最初の卯の日に帰ると伝えられている。そ

れで卯の日が早く来る年は歳徳神が食べる米の量が少ないので、米が豊富で、卯の日がおそいと逆に米に不足をきたすと言われている。

年取りの夜の食事は、普段とは別に神棚の前でとる。このとき神様の分として二人分の膳を据えておくところもあり、これは厄神の分だという。この晩の御飯が残ると、仕事が残ると言い、残さずに食べる。

年とり根っこ

深山・滝野では、この夜一晩中いろりの火を絶やさぬように大きな薪を焚く。この薪を「年とり根っこ」という。年とり根っこの灰が落ちると金が落ちたともいい、中山では「年とり根っこは金根っこ」などとも言い、一晩中火を絶やさないと年中金に不自由しないとも言う。年とり根っこについては各地区いろんな伝承をもっているが、年とり根っこに迎え火的な意味があったのかも知れない。

臼伏せ

大晦日の夜、臼を伏せ、その上に元日の若水汲みの用具である手桶と柄杓をのせておく。これを臼伏せと言っている。手桶と柄杓には、松葉を昆布で結わえておく。臼の中には、穂先を「あき」の方に向けた稲わらが敷かれ、その上に米を入れた枡がのっている。米の上には銭やとり餅・栗・柿などをのせておくが、枡の中の銭や栗・柿などは、若水を汲んだ人がもらうことになっている。

火箸休め

年取の夜は火箸をきれいに洗い、囲炉裏からあげて休ませておく。平田地区では、元日から三日までと、十五日・十六日・十八日にも火箸休みをやった。